

学習経験および学習観が学習に及ぼす影響

The effect of learning experience and learning structure

竹 口 幸 志

TAKEGUCHI Koji

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 32 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.32, Feb., 2018

学習経験および学習観が学習に及ぼす影響

The effect of learning experience and learning structure

竹口 幸志

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学 大学連携 e-Learning 教育支援センター
四国鳴門教育大学分室
TAKEGUCHI Koji
University Consortium for e-Learning, Shikoku Center, Naruto University of Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：高等教育機関を中心に学校教員を対象とした教員研修が行われている。近年は、e-Learning システムを利用した遠隔教育による研修が行われている。学習者の学習到達度は個々に異なるため、学習到達を支援し、学習の質をいかに高めるかということが焦点になっている。先行研究においては、学習者の学習定着度を詳細に分析し学習を強化する方法、学習者の学習の取り組み方に対するカウンセリングの導入など、様々な取組が先行研究として実施されている。本研究では、学習経験が学習観の形成にどのように結びついているか明らかにする。

キーワード：学習、学習経験、学習観、モデル、社会人

Abstract : Teacher training for school teachers is being conducted. In recent years, distance education training using the e-learning system is being conducted. Learning achievement degrees is individually different. It is necessary to support learning achievement and improve the quality of learning. In a previous study, recommendation of learning content, learning counseling, various efforts are carried out. In this research, we clarify how learning experiences are linked to formation of learning structure.

Keywords : Learning, Learning experience, Learning structure, model, society

I. はじめに

2012年8月、中央教育審議会より「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策について（答申）」が出され、探究力を持ち、学び続ける教員の必要性が求められた。これに応じて教員養成や教員研修の各種機能強化が図られ、独立行政法人教員研修センターは機能強化が図られ独立行政法人教員支援機構が設置された。また、全国各地の教育系大学において教職大学院化が図られ、教育委員会と連携した教員の養成と研修が実施されている。このように、学校教育をはじめとして教員の資質能力向上が焦点を集め、積極的に推進されている。

文部科学省、都道府県教育委員会、市町村教育委員会では学校教育制度の開始初期から高等教育機関等と連携して教員研修の実施や教育研究会を実施してきたが、先の答申に示されるように、教員研修の更なる充実を進めている。とりわけ、現職教員は多忙な教員が多く、義務研修を除いて、自主的に研修することが困難な場合も少なくない。このため、e-Learning システムを活用した遠

隔教育による研修機会の充実化も図られるようになっていく。

西之園ら（1998）はインターネットやパソコンの黎明期から現職教員を対象とした遠隔教育の研究を行い、実施の方向性について示唆を与えている。また、益子ら（2005）は実際に e-Learning システムなどの情報通信機器を活用することで現職教員に対して遠隔教育を実施している。e-Learning システムの活用については、看護教育や外国語教育において広く有効性が示されている。看護教育においては、新人研修や基礎教育に利用される事例が少なくない。外国語教育においては、単語の学習や外国人講師との会話学習に利用される事例が少なくない。近年では、都道府県教育委員会の教員研修においても、e-Learning システムを活用した遠隔教育により実施されている。

e-Learning システムを活用した遠隔教育が実施される中、いくつかの問題点も指摘されるが、最も大きな問題の1つとして学習者の学習到達に関する問題が指摘される。学習者の学習到達度は個々に異なるため、学習到達

を支援するために学習者の学習の質をいかに高めるかということが焦点になっている。このことに対して、学習者の学習定着度を詳細に分析し学習を強化する方法、学習者の学習の取り組み方に対するカウンセリングの導入など、様々な取組が先行研究として実施されている。

e-Learning システムを用いるような個を中心とした学習の場合、学習者自身の学習経験や学習手法が学習到達に与える影響は少なくないと考えられる。このことについて、市川（1995）や伊藤ら（1996、2003）は個人の学習観、学習動機、自己調整学習の各観点から研究を進めている。秋田ら（2014）は個人の学習観について学習経験との結びつきを指摘し、学習観の形成について学習経験過程がどのように影響しているか分析することの重要性を指摘している。そこで、本研究では、学習経験が学習観の形成にどのように結びついているか明らかにする。

II. 個人の学習

人は家庭、学校、職場など様々な場所での学習を通して学習し、学習の取り組み方や学習に対する考え方を身につけていると考えられる。発達段階によっても、学習の取り組み方や学習に対する考え方は異なる。本研究では、成人以降の学習者に対象を絞り、学習経験が学習観の形成にどのように結びついているか明らかにする。成人以降の学習者を対象とすることで、学校教育課程で学ぶ子どもたちの学習に示唆を与えるための基礎資料が得られることが期待できる。

成人以降の学習の研究として、一般企業における社会人の学習についての研究や看護医療における社会人の学習についての研究が挙げられる。これらの研究から、社会人の学習の特徴として、実務と学習した理論を結びつけようとする動機が高いこと、業務で多忙な時間に学習するために入念な学習計画が立てられていること等が挙げられている。社会人学習を対象とした研究において、学習経験が学習観に及ぼす影響を研究したものは見当た

らない。そこで先行研究で挙げられた社会人の学習の特徴を考慮しながら成人以降の学習者の学習について考察することにした。

ここでは、学校に現職として存在する現職教員を対象に聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の結果から教員の学習に対する考え方を系統的に体系化した。結果を図1に示す。結果として、学習経験が学習観に影響を与えていることが明らかになった。また、学習経験は学習者の自己肯定感にも影響を与え、自己肯定感の高さが目的に影響を与えることも明らかになった。さらに、目的によって学習観に刺激を与え積極的な学習方法の選択に寄与することが明らかになった。選択された学習方法によって得られた結果は学習経験として学習者に蓄積され、学習経験が次回以降の学習の目的と学習観に影響を与えることが示唆された。

ここで得られた結果は、定性的な知見であるため、さらに詳しく妥当性を検証する必要がある。

III. インターネットを介した個人の学習

学習者の学習について、学習動機、学習方略、自己肯定感など様々な観点から研究が進められている。ここでは、図1で得られた学校現職教員の学習に対する考え方の概念図の妥当性について検証する。学習観と学習方法の関係は、秋田ら（2014）が指摘するように、学習観が学習方略の選択に影響を与えることを指摘していることから、図1の学習観と学習方法の関係には妥当性があることがわかる。また、伊藤ら（1996、2003）の研究により自己肯定感が学習者の動機に影響を与えることを示唆しており、図1の自己肯定感と目的の関係には妥当性があることがわかる。学習観と学習経験については、秋田ら（2014）の指摘により関係性が示唆されているが、学習経験と目的の関係性、目的と学習観の関係性については、関係性が十分に確認することができなかった。

そこで、目的に対して動機と関連づけることで学習経験と目的の関連性の妥当性を明らかにすることとした。

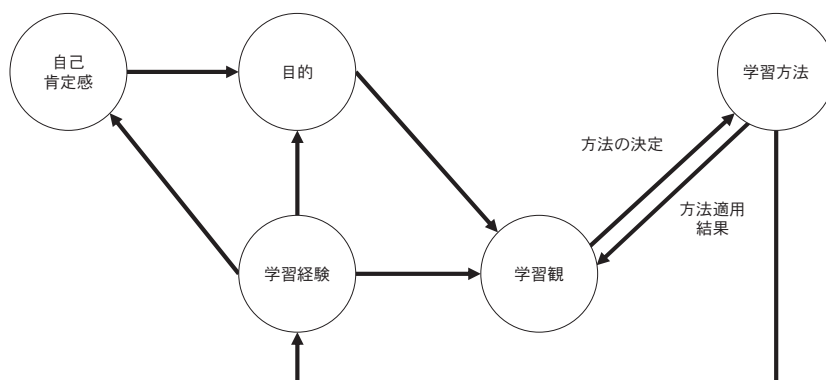


図1. 学校現職教員の学習に対する考え方の概念図

学校現職教員に対して追加の聞き取り調査を行ったところ、学習経験に基づいて学習動機が形成されていることが明らかになった。さらに、学習動機によって目的が形成されていることも明らかになった。このことから、学習経験と目的には関連性があるという妥当性が示唆された。

次に、目的と学習観の関係性の妥当性を検証した。学習経験と目的の妥当性の検証に動機を関連付けたように、ここでも目的に対して動機を関連付けることにより、目的と学習観の関連性の妥当性を検証した。学校現職教員に対して追加の聞き取り調査を行ったところ、学習動機の高さが積極的な学習観への働きかけを行い、積極的な学習方法の選択を促すことが明らかになった。このことから、目的と学習観には関連性があるという妥当性が示唆された。

学校現職教員に対して追加の聞き取り調査を行ったところ、学習動機との関連に対して、学習者自身の自己肯定感、とりわけ日常生活における自己の充実感、時間や環境等のゆとり感が影響を与えている可能性が明らかになった。学習経験が学習観に与える影響を考えるうえで、学習動機が学習観や学習方法に影響を与えていることから、学習者の学習動機に対して自己肯定感やゆとり感が与える影響について検証する必要がある。

IV. インターネットを介した学習の課題

自己肯定感については、平石ら（1990）によって自己肯定感尺度が開発されている。この中の下位尺度として、自己の充実感を測定する尺度があるため、この尺度を用いて日常生活における自己の充実感を測定することにした。また、ゆとり感についても、古川ら（1993）によってゆとり感を測定する尺度が開発されている。この中の下位尺度として、時間自由性と環境快適性を測定する尺度があるため、この尺度を用いて時間や環境等のゆとり感を測定することにした。

学習動機の測定については、市川ら（1995）が高校生の学習動機志向に基づいて学習動機の構造を研究している。しかし、成人以降の動機を測定する研究は見当たらなかったため、独自に成人以降の動機を測定する尺度を開発した。

学習動機の尺度の作成に当たっては、事前に予備調査として学校現職教員に対してヒヤリング調査を行い、学習動機を洗い出した。結果として、職位向上のために学習している、給与向上のために学習している、業務のために学習している、生活のために学習している、興味関心に基づいて学習している、経験を裏付ける知識が欲しいために学習している、人脈を広げるために学習している、以上7つの学習動機が明らかになり、これを学習動

機の測定尺度とした。以上、自己肯定感尺度、ゆとり感尺度、学習動機尺度を利用し、学校現職教員に対してアンケート調査を実施した。まず、図1に自己の充実感を測定した結果を示す。

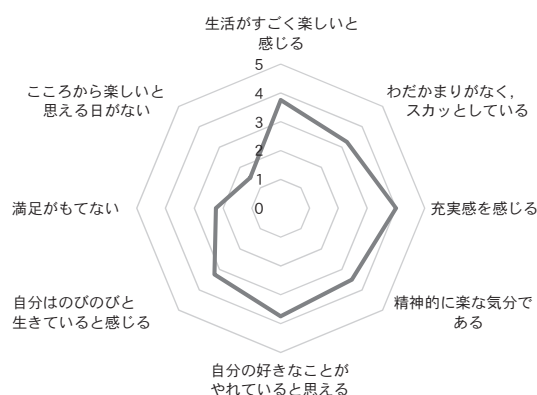


図1. 自己の充実感（平均値）

学校現職教員に対する聞き取り調査の結果、日常生活について、生活がすごく楽しいと感じる、充実感を感じる、自分の好きなことがやれていると思える人が多いことが明らかとなった。次に、図2に時間の自由性を測定した結果を示す。

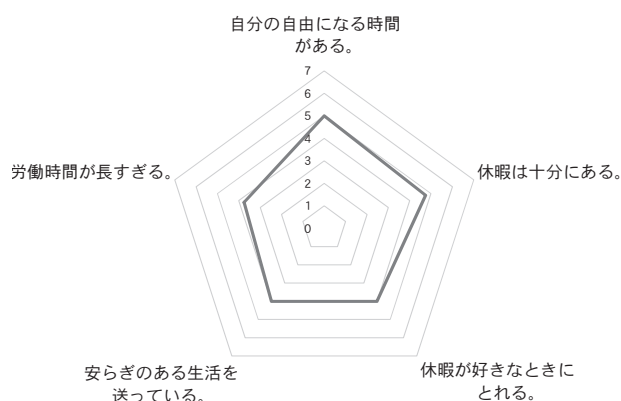


図2. 時間自由性（平均値）

学校現職教員に対する聞き取り調査の結果、時間の自由性について、自分の自由になる時間がある、休暇は十分にあると思える人が多いことが明らかとなった。

学校現職教員に対する聞き取り調査の結果、健康に恵まれている、美しい環境に恵まれている、私の生活は充実している、私はあまりにも知らないことが多い、私は今の生活に満足している、メリハリがあると思える人が多いことが明らかになった。図4に学習動機を測定した。

学校現職教員に対する聞き取り調査の結果、経験を裏付ける知識が欲しいために学習している、興味関心に基づいて学習している人が多いことが明らかとなった。

以上、自己肯定感尺度、ゆとり感尺度、学習動機尺度の測定結果から、日常生活に充実感を高く感じている人



図 3. 環境快適性 (平均値)

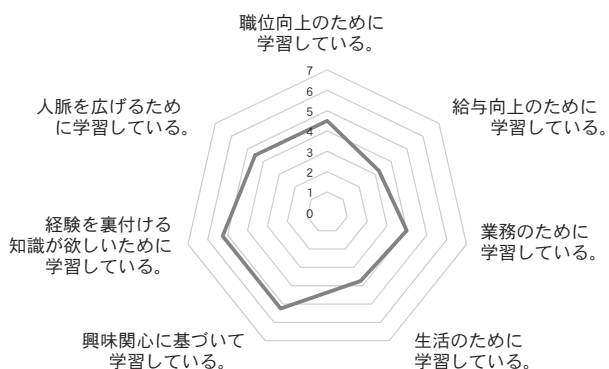


図 4. 学習動機 (平均値)

は自由時間制や環境快適性も高く、高い学習動機を保持していることが明らかとなった。結果として、学習者自身の自己肯定感、とりわけ日常生活における自己の充実感、時間や環境等のゆとり感が学習動機に対して、影響を与えていることが明らかとなった。

V. インターネットを介した学習の課題

学校現職教員の聞き取り調査の結果から得られた図 1 学校現職教員の学習に対する考え方の概念図に対して、追加の聞き取り調査で得られた学習動機、自己肯定感、ゆとり感を加え、学校現職教員の学習に対する考え方を再構成した。結果を図 5 に示す。

時間的ゆとりや環境の快適性が学習動機に影響を及ぼす。学習動機は目的に対して影響を及ぼし、目的は学習観に対して影響を及ぼしている。学習観は積極的に学習方法の選択に影響を及ぼし、学習方法は学習者の学習観にも影響を及ぼしている。学習方法で得られた結果は、学習経験として学習者自身にフィードバックされ、学習経験そのものが自己肯定観、目的、学習観に影響を及ぼすことが明らかとなった。このような一連の循環の形として教員の学習に対する考え方は形成されていくことが明らかになった。

学び続ける教員を育てるためには、学習者自らが学習する動機をもつ必要がある。このためには、まず時間のゆとりの確保と自分自身の生活を充実させることの取り組みが効果的であると考えられる。学習者自身の目的に応じて学習を行うとき、学習者自身の学習経験は学習者の学習観に影響を与えており、学習観が学習方法の選択と学習結果に影響を与える。学習結果が学習経験に対して影響を与え、後の自己肯定観、目的、学習観に影響を与えていることから、学習者自身が学び続ける姿勢を持つためには、学習結果に対する自己省察を促すことと学習の改善を促す積極的なフィードバックが必要であることが考えられる。

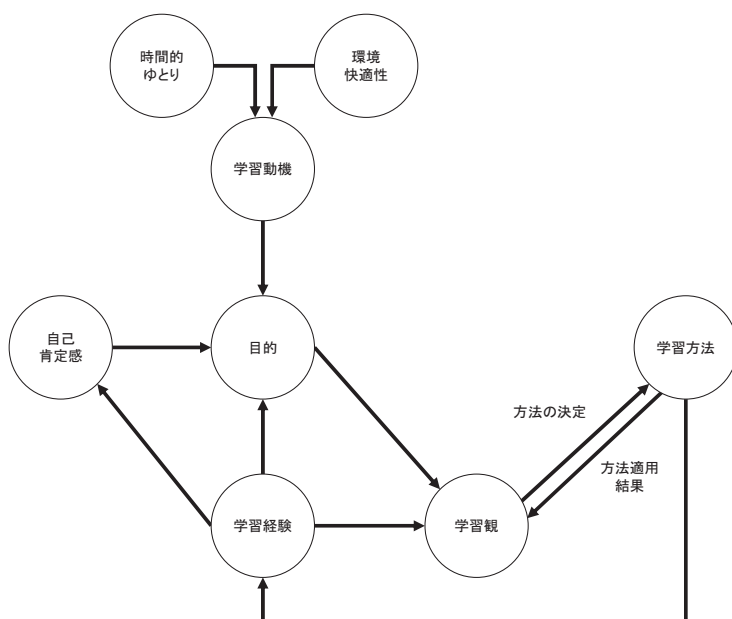


図 5. 学習動機、自己肯定観、ゆとり感を加えた、学校現職教員の学習に対する考え方

V. 結びにかえて

本研究では、学校現職教員を対象に聞き取り調査を行うことにより、学習経験と学習観の形成過程を明らかにした。結果として、学習経験と学習観には関係性があり、学習動機、自己肯定観、ゆとり感が影響を与えていることが明らかになった。今回は、成人以上の学習者を対象に調査を行ったが、学習観の形成は個人の学習と結果に大きな影響を与えることが示唆された。発達段階とともに学習者の学習観が形成されていくことを考えると、成人以前の過程から学習観の涵養が重要となる。今後は、さらに分析を進め、学習経験と学習観の影響をさらに詳細に明らかにする予定である。

VI. 謝辞

本研究の遂行にあたり、ご多忙中にもかかわらず、多くの学校現職教員の先生方に調査のご協力を賜りました。ここに謝意を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- Weinstein, C.E., & Mayer, R. (1986) The teaching of learning strategy. In M.C. Wittrock (ED), *Handbook of research on teaching*. New York: Macmillan. pp.315-327.
- 秋田喜代美・藤江康彦 (2014) 『授業研究と学習過程』, 放送大学教育振興会.
- 浅野志津子 (2002) 学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程 ―放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から―, 教育心理学研究, 第50巻, pp.141 - 151.
- 伊藤崇達 (1996) 「学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係」, 教育心理学研究, 第44巻3号, pp.92 - 101.
- 伊藤崇達・神藤貴昭 (2003) 「自己効力感, 不安, 自己調整学習方略, 学習の持続性に関する因果モデルの検証 ―認知的側面と動機づけの側面の自己調整学習方略に着目して―」, 日本教育工学会論文誌, 第27巻, 4号, pp.377 - 385.
- 伊藤崇達・神藤貴昭 (2003) 中学生用自己動機づけ方略尺度の作成, 心理学研究, 第74巻, 第3号, pp.209 - 217.
- 市川伸一 (1995) 「学習動機の構造と学習観の関連」, 日本教育心理学会第37回 総会発表論文, p.177.
- 植木理恵 (2002) 「高校生の学習観の構造」, 教育心理学研究, 第50巻3号, pp.301 - 310.
- 坂本篤史 (2007) 「現職教師は授業経験から如何に学ぶか」, 教育心理学研究, 第55巻, pp.584 - 596.

- 関和子・富永敦子・向後千春 (2014) オンライン大学を卒業した社会人学生の回顧と展望に関する調査, 第38巻, 第2号, pp.101 - 112.
- 田中理恵子・向後千春 (2014) オンライン大学生の卒業後の変化と満足度との関係, 第38巻, pp.105 - 108.
- 西之園晴夫 (1998) 「現職教育と遠隔学習と「学習する組織」 ―情報社会の教師教育を目指して―」, 『インターネットを利用した現職教育のための遠隔教育に関する基礎研究』, 科学研究費補助金研究成果報告, pp.78 - 85.
- 平石賢二 (1990) 「青年期における自己意識の発達に関する研究(I): 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討」, 名古屋大学教育学部紀要, 第37巻, pp.217 - 234.
- 古川秀夫・山下京・八木隆一郎 (1993) 「ゆとりの構造」, 社会心理学研究, 第9巻, 3号, pp.171 - 180.
- 山下暢子・舟島なをみ・中山登志子 (2014) 学生のための看護学実習中の学習経験自己評価尺度の開発 ―信頼性・妥当性の検証―, 第24巻, 第1号, pp.15 - 26.
- 堀野緑・市川伸一・奈須正裕 (1990) 基本的学習観の測定の試み ―失敗に対する柔軟的態度と思考過程の重視―, 教育情報研究, 第6巻, pp.3 - 10.
- 益子典文・松川禮子・加藤直樹・他1名 (2005) 「働きながら学ぶ現職教師のための遠隔講義における学習のマネジメント ―夜間遠隔大学院におけるブレンディッド学習のマネジメント方略―」, 『日本科学教育学会研究会報告』, 第19巻, 5号, pp.41 - 46.

